

氏 名：藤谷 未来
学位の種類：博士（看護学）
学位記番号：甲 第 6 号
学位授与年月日：令和 5 年 3 月 8 日
学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当
論文題目：[和文]
高齢者の地域ボランティア活動レディネス尺度の開発と信頼性・妥当性の検討
[英文]
Development and Examination of the Reliability and Validity of a Scale for Measuring Older Adults' Readiness for Volunteering
論文審査委員：主査 河口 てる子
副査 西片 久美子（主研究指導教員）
副査 百田 武司（第 1 副研究指導教員）
副査 大西 文子
副査 高田 由美

博士学位審査結果の要旨

本研究は、高齢者が地域ボランティア活動に参加する際に、条件や環境などのレディネスがどの程度整っているかを測定する「地域ボランティア活動レディネス尺度」を開発し、その信頼性と妥当性を検討するものである。

尺度開発過程は、①測定対象の明確化、②項目候補の収集、③尺度の測定形式の決定、④内容妥当性の検討、⑤項目検討のための予備調査 2 回、⑥項目の統計的検討、⑦本調査、⑧信頼性の検討、⑨妥当性の検討である。文献検討とインタビュー調査から高齢者の地域ボランティア活動レディネスのアイテムプール 106 項目を用意し、先行研究と 5 名の専門家による内容妥当性の検討から仮説的概念構成は、【高齢者主体の無理のない活動】、【活動しやすい環境】、【個人的な活動条件】、【参加意欲】の 4 下位尺度で、各下位尺度は独立している尺度構造と想定された。

予備調査 1 回目 100 名、2 回目 101 名で調査を実施し、IT 関連等の項目分析と因子分析、因子間相関関係等を検討した。その結果、1 回目調査では 5 因子【高齢者主体の無理のない活動】【助け合える仲間の存在】【互惠的感情】【自己決定】【経済的条件】、2 回目は 4 因子【条件に適した無理のない活動】【助け合える仲間の存在】【互惠的感情】【経済的条件】となり、特に 1 回目調査では因子間相関が低いもの(1 回目： $r = .175$ 、2 回目： $r = .247 \sim .369$)があり、仮説的概念構成を支持する結果であった。

205 名で実施した本調査では、因子分析により【条件に適した無理のない活動】、【助け合える仲間の存在】、【互惠的感情】、【経済的条件】の 4 下位尺度 16 項目となり、予備調査結果と同様に【互惠的感情】と【経済的条件】の間に有意な相関はみられず ($r = .03$)、適合度分析でも同様であった。適合度指数は、GFI = .863、AGFI = .810、CFI = .904、RMSEA = .102 であった

尺度の信頼性は、内的整合性を表す Cronbach の α 係数が各下位尺度で.741～.916、安定性は再検査法により $r = .405 \sim .638$ ($p < .001$) であり、再検査法の値がやや低いものの信頼性はある程度確保された。妥当性は、仮説的概念構造とほぼ一致しており、適合度分析も許容範囲の適合度であったため構成概念妥当性があると判断された。これらの結果から、信頼性・妥当性がほぼ確保された尺度で、下位尺度は独立していると判断された。

尺度の使用方法に関しては、下位尺度単位で得点を算出し、下位尺度の点数を総合的に判断するのが適切であり、再検査法による信頼性係数が低い2下位尺度においては慎重にすべきと考えられた。

本研究は、申請者の問題意識から課題が設定され、国内外の先行研究を検討、整理し、仮説的構成概念を示している。尺度開発プロセスの検討をていねいに行い、2回の予備調査、本調査と3回の調査を経て結論に至り、そのプロセスは適切かつ論理的の一貫性が保たれていることが確認された。

本研究は、高齢者の地域ボランティア活動を盛んにさせるため条件や環境などのレディネスがどの程度整っているかを測定する「地域ボランティア活動レディネス尺度」を開発する研究である。ボランティア活動の動機に関しては多数研究されているが、レディネスという視点ではこれまで研究されてこなかった。その意味で看護学研究として新規性、学術的意義があると評価された。

研究の意義としては、ボランティア活動支援者がこの尺度を活用することで、高齢者が住み慣れた地域においてボランティア活動をする際に、環境や条件として何が充足しているのか、何が未充足なのか把握することが可能となる。それにより、環境整備等の必要な支援を行うことでボランティア活動を促進し、高齢者が自分らしく生活できる地域をつくるための一助となることから、この研究は社会的意義が高いと評価された。

本研究は、研究の限界と今後の課題についても妥当な内容が記載され、説得力のある論文となった。

以上から、学位論文審査基準を満たしており、合格と判定した。

2022年11月25日に最終試験を実施し、本研究実施までの検討、研究プロセス、研究方法の実際、成果の活用や発展に関する質疑応答から、研究者として自立して新規研究を立案・遂行する能力、その基盤となる学力、専門知識・技術など豊かな学識を有することが認められ、合格と判定された。

なお、申請者は学術雑誌における査読付き研究論文1篇以上の研究業績を有している。

これらのことから、本論文は博士（看護学）の学位論文として価値があり、また、論文内容及び関連する事項について口頭試問を行った結果から学位論文審査基準を満たしており、全員一致で「合格」と判定した。